

## 327. 穴太飼込古墳群の調査成果

### 1. はじめに

比叡山の東麓には数多くの古墳が分布しています。今回は、平成15年度に実施した穴太飼込古墳群(図：大津市穴太3丁目所在)の発掘調査成果について報告します。

#### ■発掘調査をした理由

穴太飼込古墳群のなかを南北に横切る県道(主要地方道伊香立浜大津線)の歩道の幅を広げる工事が計画されました。当古墳群は県道が建設された昭和43年度に発掘調査され、数基の古墳が見つかっています。このことから、工事範囲に古墳が存在する可能性が高いため、工事の前に発掘調査を実施することになりました。

#### ■発掘調査の概要

発掘調査は滋賀県教育委員会が調査主体に、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関になって、平成15年11月10日から平成16年1月31日まで実施したところ、5基の古墳が発見されました。調査の正式報告書は平成17年3月に刊行しました。

#### ■県下有数の古墳密集地域

穴太飼込古墳群をはじめ大津市街地の北半域(浜大津から坂本に至る地域)には多数の古墳群が分布しており、「志賀古墳群」と呼ばれています。これらの大半が古墳時代後期頃(6～7世紀)の横穴式石室墳で、一つ一つは径10m程度の円墳ですが、数～数十基が群集する「群集墳」です。この地域の古墳の総数は約600基におよび、県内でも有数の古墳密集地域といえます。

#### ■志賀古墳群の特徴—「渡来系」集団が築造

水野正好氏は志賀古墳群について興味深い検討をされました。水野氏は志賀古墳群の古墳に、特異な石室形態(石室平面形態が正方形で天井がドーム状の石室)・特異な副葬品(ミニチュア炊飯具:カマド・コシキ・鍋・甕等の煮炊き用土器の副葬用ミニチュア品)という特徴がしばしば見られることに着目されました。これらはいずれも朝鮮半島などの大陸からの影響を示すものです。さらに氏はこの地域に渡来系集団が居住していたとする古代の文献史料もあわせて検討した結果、志賀古墳群が渡来系集団によって築造されたと結論付けられました。



図 穴太飼込古墳群の位置

## 2. 調査の結果

### ■調査の状況

今回の発掘調査は県道の歩道を拓げる部分を対象としたので、調査範囲は長さ60m・幅1.5～3m程度とかなり細長くなりました(写真1)。このように大変狭い調査区でしたが、少しずつ土を掘っていくと石が規則的に並ぶ箇所がいくつか見つかりました。石室の壁にあたると考え、さらに周辺の調査を進めると、予想どおりに石室であることがわかりました。最終的にこうした石室を持つ古墳が合計5基見つかりました。

### ■古墳の位置

古墳は細長い調査区の中で南北に列状に並んだような状態で見つかりました(写真1)。これらは今までに調査された古墳番号に続いて19号墳から順番に番号をつけました。この中で最も北側の1基は昭和43年に調査された13号墳であるとわかったことから、13号墳の番号を付けました。

### ■穴太飼込13号墳(写真5・6)

調査区の最も北側で見つかった古墳です。もともとは径10m程度の円墳だったようですが、隣接する県道と市道によって墳丘の大半が破壊されています。昭和43年度の調査で石室の前半分が調査されており、今回は残りの後半分を調査したことになります。この古墳は5基の古墳の中で石室の壁が最も高くまで残っていました。写真5は石室を正面から見たところです。両側と奥の壁が上にいくほど傾斜するドーム状の石室であることがわかります。石室は後半分のみの調査でしたが、以前の調査記録と照らし合わせると、正方形の玄室(埋葬した部分:写真5の部分)に羨道(玄室に出入りする通路)がとりつくことができました。玄室の床半分にはお棺を置くための台として平らな石を敷き詰めています。この敷石のすぐ上から須恵器や土師器等の土器類などが出土しました。写真6は13号墳からの出土遺物です。須恵器には壺(最後列右側2点)や高杯(壺の前にある台付きのお椀)があります。左側にある茶色い土器は土師器です。左手前側はミニチュア炊飯具のセットです。カマドの上に鍋をのせ、さらにその上にコシキ(蒸し器)をかけています。その後ろには土師器の甕がありますが、これも炊飯具です。最前列にある3点の茶色の棒は鉄釘です。お棺を組み立てるために用いたものです。

### ■穴太飼込19号墳(写真2)

この古墳は調査区の最も南側にありました。写真2は石室を前から見た写真です。この古墳も後世に墳丘の大半を削られしまったためによくわからないのですが、11m程度の円墳であると考えられます。石室は玄室の後半分が残っているだけで、石室の形や大きさに



写真1 北から見た調査地

については十分知ることができませんでした。玄室の床面には平らな石を全面に敷き詰めています。遺物は若干の土器・鉄器類が出土していますが、大半は後世の削平によって持ち出されたようです。

### ■穴太飼込20号墳(写真3)

調査区の真中付近で見つかった古墳です。この古墳についても後世の削平により墳丘の大半は失われ、石室も玄室の壁面最下部近くの石材が残っているだけでしたが、玄室はかなり幅が広く正方形に近い形になると考えます。床面には敷石は敷かれていません。遺物は石室内の埋め土から近代の遺物が出土したほかは出土していません。

### ■穴太飼込21号墳(写真4)

20号墳の北側で見つかりました。この古墳も墳丘の上半分を削平され、石室も壁面の最下部近くが残るだけでしたが、幸いなことに石室の北側は地形が落ち込んでいたため、墳丘が比較的良好に残っていました。石室も羨道と玄室のほぼ全体の形がわかる程度に遺存していました。写真4は羨道側から玄室を撮影した写真です。玄室床面の半分には平らな石を敷き詰めています。玄室の床面からは土師器・須恵器・鉄釘が出土しました。これら古墳時代の土器に混じって、平安時代末～鎌倉時代頃の土師器の皿が出土しました。これは古墳が作られてから数百年後の時代に石室内に人が出入りしていたことを示すものです。

### ■穴太飼込22号墳

21号墳と13号墳の間で見つかった古墳ですが、たいへん残りが悪く、詳しい状況はわかりませんでした。



写真2～5 調査した古墳の石室



写真6 13号墳から出土した遺物

### 3. まとめ

以上が、穴太飼込古墳群で実施した発掘調査の結果です。最後にこれらの古墳がいつ、どのような人によってつくられたのか、という点に触れて、まとめにかえたいと思います。

#### ■いつつくられたのか—時期

出土した土器や古墳の立地などから、古墳がつくられた時期を考えますと、最も高い位置にある20号墳が6世前半頃につくられた後、13・19・21号墳が6世紀末から7世紀前半頃にかけて次々とつくられたようです。

#### ■だれがつくったのか—被葬者像

水野氏が述べておられるように、穴太飼込古墳群をはじめとする志賀古墳群は渡来系集団によってつくられた古墳群が大部分であるといえます。今回の調査でも13号墳の石室がドーム状石室であることに加えて、ミニチュア炊飯具のセットが出土しています。これ以外の古墳についても渡来的要素を見出すことができるので、今回の調査でも、穴太飼込古墳群の被葬者として「渡来系集団」を想定する水野説を裏付けることができたといえるでしょう。

#### ●さらに詳しく知りたい方へ—文献案内

『穴太飼込古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、2006年（滋賀県立図書館・県下市町立図書館でご覧になれます。）

#### ●現地へのアクセス

今回調査した古墳は残っていませんが、隣接する老人ホーム敷地内には昭和43年度に調査した石室が移築されています。京阪電車石坂線穴太駅下車徒歩1分。

また、近くの穴太墓地内には穴太野添古墳群の古墳が遺跡公園として保存されており見学できます。同穴太駅下車徒歩15分程度。

#### ●周辺の展示施設

##### ・大津市埋蔵文化財調査センター

大津市滋賀里一丁目17-23 / 077-527-1170  
 入場無料 / 土日・祝祭日・年末年始は休み  
 京阪電車石坂線滋賀里駅下車徒歩5分

##### ・大津市歴史博物館

大津市御陵町2-2 / 077-521-2100  
 入場有料 / 月曜日（祝祭日は開館）・祝祭日の翌日・年末年始は休み  
 京阪電車石坂線別所駅下車徒歩10分

（財団法人滋賀県文化財保護協会 辻川哲朗）